歴史の認識に就いて

文學博士　田邊元

歴史の目的が、自然科學の普遍的法則定立を目的とするに對し、對象の個性を記述するにあることは蓋し否定すべからざる眞理であらう。勿論歴史の對象とする所も之を部分に分てば、他の對象に於ても屢々發見せられる如き通性を有するもの卽ち普遍的なる法則の一實例として解せられるものであることは疑無い。併し若し分析に由つて此樣な普遍的法則の實例たる要素を明にし、その生起の由來を說明するに止まるならば、歴史は方法論上自然科學と異るものとして獨立なる位置を占めるべき理由は無い。歴史が方法論上一個特異の學の種別として自然科學に對立するものたる以上縱それは分析に由つて普遍的法則の一實例として解せらるべき要素に歸せらるゝとも、その統一的全體が決して再び繰返さるゝことなき一回限りの生起事實として個性的表現を要求する如きものを對象とするのでなければならぬことは疑を容れない。歴史の認識は特定の環境の裡に發展を遂げた歴史的全體なるものゝ個性記述といふことをその特色とするのである。それでは此樣な所謂歴史的全體なるものは如何にして成立するか。歴史的對象の部分は如何なる原理に由つて全體に統一せられるか。その統一の原理は自然科學の場合に於ける統一の原理と如何なる相違を有するであらうか自然科學に於てもその終極の目的とする所は自然の全體を若干の最普遍的なる理論に由つて統一し

凡ての自然現象が其等の理論の結合に由つて普遍的なるものゝ特殊化限定として理解せられる如き所謂世界形象を形造るとにある。概念を以て唯實際の經驗から抽象概括して作つた所謂類概念に其本質が盡きると考へるならば、之を以て此樣な世界形象の構成をなすことは出來ないけれども、他との關係に於て特殊を分化し出す所の普遍を意味する所謂函數概念が自然科學の概念の本質であるとするならば、特殊の部分を若干の普遍なる原理の綜合に由つて統一し、前者を後者の分化として全體的形象を構成することは明に可能でなければならぬ。方法論上自然科學の冠冕といふべき理論物理學の目標とする物理學的世界形象なるものは實に斯くして形造られるのである。之に於ては特殊の個的事實は唯數量上普遍的なる函數の特殊値として解せられ、特殊相互は全く外的なる關係に於て並置せられ、其間を貫く何等內面的意味の發

展なるものなく、從つて一が他を以て換ふべからざる價値的の個性を有するといふ如きことも認められない。其內に於て時間上相繼ぎて起る現象の間に存する因果關係の如きも、自然の連續的なる狀態を結合する微分方程式の定變數（parameter）としての時間の小なる値と大なる値とに相當する函數の値の關係を意味するに過ぎない。ベルグソンの所謂幾何學化の極、凡ての內面的意味の發展を抽離し、一切を外面化し非人格化して唯函數概念の分化といふことに特殊の全體に於ける統一を窮極せしめるのが方法論上自然科學の普遍化的認識の體系構成に對する目標である。然るに歴史の個性的認識は之と趣を異にする。歴史に於ては對象の全體に對する部分が相互全く外的なる關係に並置せられ、其間に何等の內面的意味の發展なるものなく、全體はその外的結合に止まるといふ如きものであることは出來ぬ。個性を有する全體な

るものは生けるもの、創造的なるものでなければならぬ。その創造に由つて實現する價値が部分を內面的意味の關係に內から統一するものでなければならぬ。勿論自然科學の場合と雖も物理學が數學になりきることは出來ない。物理の世界には單なる數に分解し盡す能はざる力といふ樣な概念があつて、內から此世界を統一して居る。併し方法論上からいへば物理學は此樣な特有の內面的統一を數の外面的統一に分解し、一切を數理の或特殊なる限定に歸することを其嚮導觀念として居る自然科學の方法論上の理想は數の函數關係への外面化といふことである。全體が部分の外面的なる結合に歸せられる如き體系が其窮極の目標である然るに歷史は之と反對に全體が內面から部分を生かし、之を貫きて意味發展の關係に之を結合するものである。全體から離された部分は他の同類なるものと共に普遍なる法則の一實例として理解せられるもの、唯全體の內に統一せられるときのみ個性的なる全體の生命を宿し、之を表現するものとして、自ら個性を享有するのである。歷史の全體的形象の統一は內面化の方向に向ふ。一般に歷史に於ては主體としての個人なり民族なりの發展權移を研究するのに、環境なるものが極めて重要なるものと認められて居る。併し環境といふものは其裡に在ると考へられて居る個人なり民族なりの精神生活を離れて外的に一定した意味を有するものであらうか。否、決して左樣ではない。外面的に自然科學的の立場から觀て同じと認められる環境が假にあるとしても、其裡に置かれる主體の之を如何に體驗するかに從つて全然其意味は個別的である。環境は其語が本來意味する如く外圍から主體を環る境遇といふ樣なものではあり得ない却てそれは主體の體驗に從つて、內から與へられる意味により個別化せられたとして、內的なるも

である。内からの統一を離れて歴史上の環境なるものはあることが出來ぬ。而して歴史的全體を形成するに當つて缺くことの出來ぬ結合の形式と考へられて居る所謂歴史的因果なるものも此歴史的主體の體驗に於ける、内面的自發性を通して結合せられた時間上の必然繼起關係を外にしてはあり得ないと思ふ。因果は單なる時間上繼起の關係ではない。それは必ず相繼いで起る事象の間の必然的なる綜合を意味する。然るに結合の必然といふのはその綜合が之を含む統一の全體に由つて、變改を許さゞるものとして限定せられて居ることに外ならない。自然科學的因果の場合に於ては特殊をその結合限定として全體に統一する普遍的法則乃至理論の體系がその結合の必然性の根據となるのである。之に對し歴史の場合に於て全體を形成するものは主體の個性的發展より外にはない。歴史的因果の必然的結合に根據を與へるものは、その

の體驗に由つて個性的意味を事象に賦與する主體の内面的發展の全體でなければならぬ。之を離れて歴史的因果なるものは考へることが出來ない。歴史的主體の内面的發展に依る統一から離された内容に就いて因果の關係が認められるならば、それは自然としての立場から外面化の方向に、普遍的法則にもとづく必然繼起の關係が設定せられることを意味するより外無い。實際歴史的全體を形造る要素も全體から抽象せられゝば、單に法則の一實例としての意味しか有せざるものとなるのであるから、これを自然の立場から自然的因果の關係に結合することが出來るのは當然のことであらねばならぬ。しかして認識の抽象的なる立場は具體的なる立場の手段として、後者の目的に由り統一せられたる全體の要素となるのは當然のことであるから、具體的なる歴史の認識が抽象的なる自然的因果を其要素として含むことは何等怪しむ

を要せざることである。併し特に歴史的なる因果の成立する爲めには、必ず個性の內面的發展に從ひ、體驗の內面的意味といふ立場から觀られた事象が、全體に由つて根據附けられたる必然の關係に結合せられることを要する。而して因果は法則の普遍性に基く自然的因果か主體の個性的發展に基く歴史的因果かより外にはあり得ない。此二種の因果の外に自然的でも歴史的でもない因果があると考へるのは、兩種因果の方法論的に分化せられず相錯綜する所の常識の段階を、論理上一定の獨立した認識對象界と誤認する結果に外ならぬと思ふ。とにもかく歴史の特色をなす歴史的因果なるものは、內面的意味の立場から事象の全體を體驗的に統一する歴史的主體を離れては意味が無い自然科學に於ては自然現象の全體を統一する主體なるものも唯特殊を自己の分化として外面的に統一する函數概念に歸する。特殊を離れて自立し、自己の內面から新なる意味を創造する如き主體なるものは自然科學の方法上窮極に於て認むべからざるものである。然るに歴史に於ては此の如き內面的發展をなす創造的主體が特に歴史的といふ意味を支持するのであつて、之を抽象するとき歴史の歴史たる所以は全く失はれてしまふ。歴史には必ず個人なり、民族なり廣義に於ける人格がその全體に統一を與へる主體として含まれなければならぬ。人間の發生とともに本來の意味に於ける歴史が始まるのも之れが爲めである。勿論歴史研究に於いて個人に重きを置くか集團に重きを置くかといふやうな立場の相違はそれ〴〵理由を有することであつて、輕々に論評することを許さゞるものであらう。しかし斯かる相違は當面の問題には關係の無いことである。唯或は個人にせよ或は集團にせよ、とにもかく自己の內面的創造力に由つて、體驗せられた事象を內からその意味に從ひ統

一する廣義の人格を主體とするのでなければ歴史は成立しないといふのが今の主張の要點なのである。

それでは體驗に由つて事象を內面から統一する人格なるものは如何にして認識の對象となるか。斯かる人格が外から概念的に普遍的なる法則の結合に由り認識せられるものでないことは今改めて說くを要しないことであらう。我々が他の人格を知るのは之を我々自らの內に於て共感に由り內面的に理解するのである。所謂感情移入と名けられる如き作用に由り、自己自身の體驗を投入して知るのである。他の人格を知るのは Begreifen でなくして Verstehen である。Verständnis に由り對象の內に入り、自己の體驗を通じて直知するのである。人格內面的發展に於ける統一といふのは、此樣な立場から自己自身の體驗により直接に理解せられた統一でなければならぬ。而して若し前述の如く歴史の認識が必ず廣義に於ける人格に由つて、內から統一を形造る全體を形成することであるとするならば、それは心理學者の名けて感情移入といふ樣な直接の理解を其本質とするものであることは疑を容れないことであらう。此處に作用として見た歴史的認識の特色がある。併しながら飜つて考へると、我々個人として限定せられた主觀が他の人格を內から知ることが出來るといふのは解す可からざる一個の謎であるといはなければならぬ。個人の經驗的なる精神現象を論ずる心理學者が、感情移入の作用を以て更に進んで說明することを能はざる原始的の事實と認めるより外無いとするのも當然のことである。限定せられた一つの人格が他の人格を如何にして理解し得るかを說明するといふ事は不可能の要求であらねばならぬ併しながら我々が他の人格を理解するのは限定せられた一つの人格といふ立場でするのではない。

絶對的に限定せられた一つの人格が他の人格を知るといふのはそれ自身矛盾したことである。他の人格を理解し得る限り、一つの人格の立場に立つのである。我々の内から發する一々の純粋活動の體驗は、それ自身では、何等の限定を有せざる自由の活動である。如何なる體驗の内容を以て統一的なる人格の發展をなすかは其場合の自由に屬する。現實の一人格は無限に可能なる人格の特殊化限定せられたものであつて、その一々の發展に於て背後には無限に可能なる普遍の人格を負ひ、その特定なるものが自由に限定せられて現實となるのである。現實なる一人格は無限なる普遍的人格の限定である。凡て特殊を限定するといふことは普遍の上に於て始めて可能となる。初めから絶對に特殊として限定せられたるものは特殊といふ意味さへも有することは出來ない。特殊といひ限定といふとき已にその半面には普遍と自由とを豫想する個性といふのも普遍的全體の上で限定せられたものでなければならぬ。人格が個性を有するといふのは、無限に可能なる創造的發展の普遍の上に於て特殊化限定せられたものであるといふ意味である。勿論此處に謂ふ普遍とは普通に論理學で考へられて居る樣な特殊から抽象した普遍ではない。斯かる抽象的普遍でなくして、凡ての特殊を内に含み無限に豐富なる内容を持つ所の普遍的全體を謂ふのである。斯かる意味に於ける無限の可能的全體としての普遍を背後に負ひて、その表面で限定せられたものが特殊の人格となるのであるから我々の人格は常に背後の無限に可能なる普遍的全體に於て相通じて居る。我々は自己の現實なる特殊的人格の限定を脱出して背後にある普遍的全體に還り、此立場で如何なる他の人格の内面的統一をも内から理解することが出來るのである。我々が他の人格を理解するのは限定せられた自己の人格

の立場に於てするのではない。之を脱して背後の普遍的全體的人格の立場に立ち、其上で自由に如何なる人格ともなり其内容を内から體驗するのである。經驗心理學の立脚地に於て更にそれ以上説明するとの出來ぬ原始的事實と認められて居る所謂感情移入は唯此形而上學的背景の上に於てのみ理解せられる。之を離れては前者は遂に解すべからざる謎に終らなければならぬ。歴史の認識は此哲學的基礎に於てのみ可能となるのである。併しながら純粋なる理論の上で可能なることが常に完全に現實となつて居る譯ではない。如何なる人間と雖もその背後に負ふ所の普遍的全體的人格に於て相通じ相互に共感理解する途を有するものと考へられなければならぬことは今述べた如くであるけれども、その共感理解の範圍は種々の程度を有するものである。所謂現實なる特殊人格の内容と認められて居る所のものを光明の焦點として、其

周圍に漸次明から暗に及ぶ普遍的全體的人格の暈を負ふのが我々の人格であるとすれば、その暈の光明の度、又光明るき部分の廣狹は人に由つて千差萬別なのである。勿論如何に光明の度弱く、暈の大いさ小なるも、それが零に歸して居ることはない。若し斯かる人があるならば全然他の人格を理解し共感し同情することは出來ぬ筈である。併し同時に其度の極めて多樣であり、理解の範圍に著しき廣狹の別あることも認めなければならぬ。歴史の認識に於て必要なのは實に此理解の明に廣きことである。主觀の背後にある普遍的全體的人格が完全に自由に實現し得られるといふことが歴史家の理想でなければならぬ。如何なる種類の英雄傑士の心にも共感することが出來、如何に特異なる時代精神と民族の心をも理解し得ることが、歴史的認識の主觀の要件である。此樣に普遍的全體的人格の立場に自由に立つことを得て、對象と

する歴史的全體に統一を與へる人格の內面的發展を內から理解し、之に由つて個性的なる形象を形造ることが歴史家の任務である。其業は決して自然科學の場合に於ける如く外面的の關係に於て形象を構成する概念化の能くする所ではない。唯內から體驗の統一を以てする形式に依るのでなければならぬ。歴史に於ては直觀、內面的理解といふことが其認識の精髓をなす。此點に於て歴史は藝術の創作、殊に文學上の創作と著しき類似を有する。小說や戲曲の創作に於ては歴史の場合と同じく、主觀が無限なる普遍の全體心に自由に出入し得ることが第一の要件でなければならぬ。文學者は男性にして女性の心となり、老者にして少者の心となることが出來なければ、個性の一貫した人物を描寫することは出來ぬ。シエイクスピヤが myriad-minded といはれるのも此資格を具有した爲めであらう。唯文學の歴史と異る所は現實に束縛せられず、自由に作家の自己表現の要求に指導せられて、想像力に由り新なる世界を創造することである。之に反し歴史は飽く迄現實の形成であつて、その形成の課題なるものは主觀の自由に委せられるものでなく課せられたものでなければならぬ。此處に歴史が想像に基く創作でなくして現實の認識たる意味がある。併し之を離れて全體形成の過程を考へるならば、その普遍的人格の立場に於ける理解に基き、主體の人格的發展に由る體驗の內面的統一を中心とする個性的全體の形成たる點に於て、文學の創作に通ずる藝術性を有することを認めなければならぬ。若し歴史感 historischer Sinn といふ如き概念が許されるならば、それは實に此共感理解を通じての全體の形成をなす能力を指すべきものではあるまいか。歴史の認識は實に此樣な一種の直觀に基くものであると云つてよからう。

以上は歴史家の體驗に對し極めて理解の乏しい私が散て自ら揣らず、歴史の認識に就いて考べる所を極簡單に要領のみ記したものである。其道の識者からの敎に依つて蒙を啓かるゝ機緣ともなるならば望外の幸福といはなければならぬ。（十、十一、十二）

清朝初期の繼嗣問題

文學博士　内藤虎次郎

こゝに清朝初期といふは、太祖、太宗二代より世祖の立てる頃までの間を指す。清朝にて康熙以後、皇太子を建てずして、皇帝が其の繼嗣たるべき人を默簡し、密書秘緘して、之を宮中の正大光明の額の後に藏することゝしたるは、異常なる制度とせらるゝ所なるが、其の初期に於ける三尊佛等の制度も亦實に奇異の至りなれば、實錄其他正確なる史料によりて、試みに此篇を草することゝしたるなり。

實錄にては清朝の祖を肇祖、諱は都督孟特穆とすれども、こは明人、若くは朝鮮人の記する所によれば、建州衞の酋長猛哥帖木兒のことを誤り傳へたるのみならず、猛哥帖木兒は、又た佟佳江（古への婆豬江、今の混江）附近なる董鄂部の祖にして、清朝の祖にあらざる疑あり。(1) されば興祖、諱は都督福滿以前の事は、信據するに足らざれども、興祖の父を錫寶齋篇古といひ、肇祖の子たる充善の末子にして、祖居の地たる黑闔阿喇に居りしを見れば